ねこ山　　山口県

むかし、ある家に、奥さまとお手伝いの娘が住んでいました。ねこをいっぴき飼っていましたが、奥さまは、いつもこのねこをいじめていました。お手伝いの娘は、ねこをかわいそうに思って、とてもかわいがっていました。

ところが、あるとき、とつぜん、ねこがいなくなりました。娘は、さびしくて、毎日泣いてばかりいました。すると、ある日、旅のお坊さんがやって来て、娘に、どうしてそんな悲しそうな顔をしているのかとたずねました。娘が、

「うちのねこが、とつぜんいなくなったのです」と話すと、お坊さんは、

「そのねこは、九州のいなばの山のねこ山にいるから、会いに行ってごらん」と教えてくれました。

娘はさっそく、奥さまにたのんで、旅に出ました。

長い旅をして、娘は、ようやくいなばの山にやってきました。ところが、ねこがどこにいるのやら、さっぱりわかりません。そのうちに日が暮れてくるし、娘はこまってしまいました。そこで、ちょうど通りかかった人にたずねると、

「もう少し先へ行くと、りっぱな屋敷があるから、行ってごらん」と教えてくれました。

娘が歩いて行くと、山の中に大きな家がありました。

「なんだかきみょうな家だけれど、今夜はここで泊めてもらおう」と思って戸をたたきました。すると、美しい女が出てきて、

「何の用かしら」とたずねました。娘は、

「うちのかわいいねこをたずねて来たのですが、道が分からなくてこまっています。ひと晩泊めてもらえないでしょうか」とたのみました。すると、女は、にたりと笑って、

「おまえも、食いころされに来たのか」といいました。

娘が、恐ろしくて黙っていると、ひとりのおばあさんが出てきて、

「この子が、失礼なことをいうたが、かんにんしておくれ。今夜はここに泊まるといい」

と、親切にいってくれました。

その晩、娘が寝ていると、となりの部屋で話し声がしました。なんだか変に思って、ふすまを少し開けてのぞいてみました。すると、目の覚めるような美しい女がふたり寝ていました。そのとなりの部屋ものぞいてみると、やっぱり美しい女がふたり寝ていま

した。耳をすましていると、女たちは、
「今日来た娘は、かわいがっていたねこをたずねて来たのだそうだよ。だからかみついてはいけないよ」といっていました。娘は、恐ろしくてもう寝られませんでした。
しばらくすると、反対側のふすまが開いて、おばあさんが入って来ました。よく見ると、顔はかわいがっていたうちのねこでした。ねこは、
「よくたずねて来てくれたねえ。けど、わたしはもう年をとって、里の勤めはできないからここに来たんだよ。ここに来ることは、ねこのしあわせだから安心しておくれ」といいました。そして、
「ここには、日本じゅうのねこが集まって来る。おまえの来るところではないから、早く帰れ」といいました。それから、娘に、白い紙包みをわたして、
「この宝物を持ってお帰り。家につくまで、けっして開けてはいけないよ。もしとちゅうでねこに会ったら、これをふるといい。そうすると、道をあけてくれるから」といいました。
娘は、お礼をいって、屋敷を出ました。屋敷の周りは、ねこでいっぱいでした。娘は、紙包みをふりながら歩いて行きました。すると、ねこはみんなよけて道をあけてくれました。
家に着いて、紙包みを開けてみると、中には犬の絵が描いてあって、その犬が、ほんものの小判(こばん)を十枚くわえていました。
奥さまはそれを見て、たいそううらやましがりました。
「そんなお金があれば、おまえは一生働かなくても食べていけるよ。わたしは、ねこの主人だから、もっとたくさんのお金をくれるにちがいない」
奥さまはそういって、いなばの山に出かけて行きました。
奥さまは、娘に教えてもらったとおりに行って、屋敷に着きました。戸をたたくと、美しい女が出てきて、
「何の用かしら」とたずねました。奥さまは、
「うちのねこをたずねて来たんだよ。ひと晩泊めてもらえないかねえ」といいました。
すると、女は、にたりと笑って、
「おまえも、食いころされに来たのか」といいました。
そこへ、おばあさんが出てきて、

「この子が、失礼なことをいうたが、かんにんしておくれ。今夜はここに泊まるといい」と、いってくれました。

その晩、奥さまが寝ていると、となりの部屋で話し声がしました。ふすまを少し開けてのぞいてみると、大きなキジねこが二匹(ひき)寝ていました。となりの部屋には、大きなさめねこが、やっぱり二匹寝ていました。奥さまは、すっかり恐ろしくなりました。

しばらくすると、飼っていたねこが、入って来ました。奥さまは、

「おまえ、もう帰ろう。こんなところにいると、どんなことになるか、わからないよ」

といって、連れて帰ろうとしました。ねこは、いきなり奥さまにとびついて、かみころしてしまったということです。

おしまい

村上郁再話

資料『旅と伝説』昭和９年１２月号／三元社